



新編
下

13
2942
6



2942
6

昭和九年
七月九日

兩個女兒郭花笠第二編卷之下

江戸

松亭金水編次

第十回 彰の怒

當下の海は雁渡り。世つて在り。合点糖と紫糖の

血へ盛。ハイカ雁が出来。ハヤヤ金水梅がま

五つの子。路傍のハヤヤ。吾と名付。夫ハ。そりやア

終。くあの血が。あり。ろい。ト。多。小。どろ。く。肉。卵。を。卵。を。玉

ありや。宣。中。の。強。が。雀。小。雀。子。何。ろ。ろ。の。や。ろ。ろ。わ



来りて子。そと雨小飛とんと顔りふ小里の正を影一
 まはらう。例小飛く笑て飛ると重極くと数回ひ
 まはらう。耳よりるゆごととなれと手か渡の唄や之強より
 その方へ耳を流して笑て飛きう何れもあらまらう
 知るる人でもごいまはれけれどあひ切てそのあ探さんと
 やう小使まうううあわど阿千代さんといふ様がまう
 今どの千代まきさんといひまはらう。探探はより何れも探
 金盞とやうご。その内もか屋敷のか室にまきさんといひ

か方が夜妓の情合客ごとまらじまうまて始を知り
 まうこのサト笑て胸うり笑み希がうまあ探がゆううエ
 をとよア何れもか知れる管ご。そ処をあらあ茶又さん
 や。あつあさんといひまらるのござ。アまごゆません夫へ何卒
 あつあさんといひまらるのござ。アまごゆません夫へ何卒
 変もるのう。金体宅小飛まきるゆう。何卒と思つて
 厚面皮に張るゆもあつあれど。姉さんい堅い性質心は
 とよあつあさんといひまらるのござ。アまごゆません夫へ何卒

仔細あるやと性所が多く何程かおあふ義理が
 海ね人と云え 己程くその事も使まうまうと云う事
 い毎日每晚までお根よかきひるまうと云う事
 地人のあぢアアおれね君後由解りどる白痴さ
 あり掃きんの心程やア何程よ様一のり知れません大底
 む直徳切でまねお出まはるまのりまを掃きんが移への義
 理が海ものこと云て何れまはる強くそ布を形りつと
 その志を思ひまはると強よ海のとねね程程を様しく

思ひまへ。程く掃きんの心程がトひひりて君知らん
 様一房の懸は解りまはるまを掃きんが移への義
 まとい知らば義母さんやそ布を私の掃きんと只と
 今もその吐し可笑な身と云おひるまう。まアその
 香るりのりへ産まはるか何日か一回を掃きんの方へお
 きてひるまるといふるが。知れまはる房まはるの房様と
 るるの義母さんが君もよい掃きんをまへ根で彼と云
 る遠ひるのそれを安の只産まると云うと今うう苦勞ある

新編

まだヨト慶女心は性先を業トるま由女の情矢又身へ今更
ふ何とりよべき洞もあつて。その文を懐中し一是が知れ
うう言あ奴が定めく後をかまざるさううが。よか勝子
み理屈とりへん阿千代さんと新あひこの身は流さる
後ののち後しくそとばはあ奴の眼を造んどことなせ由
す。又不爰嬢奪とりよせもあいに肉の遠の家は皆
中とりよ作院のある。身をたつらう不始まるる。怨め
らとるう知らるるへが。その後る工の端々の覚悟どうして

おあも私の松を破落すのを良人より始終と新
れもあるまの。私もまた新まつてえねば義理の中か
希を女房お持工へあうる。序うあふをことと
義母さんへかあう。室積子吐しとて何処ううまりと
ま派る人と婿よとつて。私合か着るまるが屋敷が
姉さんへ血縁もる。親の存心も孝けでも一旦泥おへ
落さぬふ家と嗣せらるるもまるまの。おれしくえねば
目よ年々明て由何方へう。縁付るまる身分の。その姉

さんへ美理をいへア入らるゝ極まりの。表も表ふがあらるゝ
おあいのふ居ておて改と翻の考行どろろ。その様りふ
まさへヨ「ハ」く畏りますと史とアおあさんい姉さん。業の
明のを後て居て史婦よお放るさるのま「け方」たね
りふ心持をも。浮世のるゝあらうろりと考とく驚ろとるゝま
ハ「ハ」くそのと死ふ放てる遠ふ不ゆしく。その心お在
まさるゝ。然しの中も使うがあつて姉さんい改は宜
ごまのまはうろサト他ま心姉とおひするゝ心裡の心健さ

くるふ袖も濡つべー

第十二画 往来の過

あふさきるさのハ街ふ。娘ひまゝる大都會。何方ふれ
どあゝわること。大ト大慈の冥場まで。歩て成運ぶその
人。と。世のつとも。海さや。今日ひとりけ十八日。正
親せ者の縁日として。日のくれがるは及い。分る往来も
娘りく。と。まゝる。校の恐いあらう。かの冥誓との説法
み。三千世界の佛を。あう。あう。ひふを。妹の昔男は長女が。集

命いのちさうも尚なほ揚あがりりて。或あるひは強あつ心こころ一ひとと味あじふ。志こころ佛ぶつ唱なへく
性あやもあねは。木き魚いさな備ひぐそつひの挑あや克く者ものとの夜よも言ことやふ。
ひ念ねん佛ぶつの元もと中なかもあり。こを引ひ連きる女をんな群ぐんをを娘むすめひ
ふ心こころうきん。保たもまごつろの業わざ信しんあり。まごつろの茶ちや店てん女をんな見
夫おつとをの姉あねを強あつまゆ。弱じやく官くわんの連れん中ちゆうの時ときの流ながれをさ
そく。風かぜ流ながれをさとせらるる。千せん差さ万まん別べつのその
中ちゆうは年ねんの二十にじゅう三さん日にちのて。色いろ白しろく脊せき高たかくのそとあうね
男おとこ子こ。夜よ當あた持もちのまごつろ。五分ごぶんでも透すぬ身みのあら人ひと連れ

おりく年ねん以もひ。十九じゅうくう二十にじゅうう。碇いかり田でん留りゅうをを何どこ不ふやら
人ひと果はつた。その風かぜ信しんを推お量りやうる。圓えんの由よしある人の果は身みの
病やま命いのち不ふ受う落おて心こころるる。比ひも輕かろ夕ゆふを人の娘むすめの死しと
あり。世よをい送おくれるものめあう人ひと。連れんの男おとこふ二ふた是こゝ是こゝ後のち
れて急いそぎ夜よをあげ。女をんなへ着きさん。テトか信しん。かあさんの
是こゝの何なに家いへを板いたは早はやい。傳つたへと一ひと雨あめ不ふ連れんく性あやてか其その。
万まん一いちをむねるといける。うらうらウウトひひ。男おとこ不ふ連れんく。後のちは
とまのり。捕とらへま。男おとこの法はふをうりむ。着きはく。そ

表れる奴をさきびとも軍やアねん。たぐれど不がこ
あ。鏡者さま。迷見ゆもあうり。そりやアたねどけれ
ど。ちぐねく一人て帰るのへ長くたごあ。板のねとる
人。おのちで前々さま。い。むらと。裏の方へをり板を
とり。狭うがうら。ま。ま。け。起。ま。で。一。所。は。連。て。本
て。か。兵。で。る。け。れ。ば。宜。否。ア。る。後。さん。ど。ヨ。者。ま。ま。か。株。で
人の。お。ふ。も。ね。く。と。成。り。よ。ヨ。オ。ナ。ニ。お。も。る。の。り。あ。る。の。の。
い。る。も。か。朋。友。の。矢。又。さん。と。何。所。か。出。よ。ア。ま。い。る。ま。も

名妓が。減。小。能。く。こと。の。よ。い。を。あれ。や。ア。後。さん。由
裏。小。控。て。や。う。さ。ア。あ。る。め。人。と。矢。又。さん。が。か。を。い。情。後
今。後。その。名。妓。の。よ。く。性。う。と。り。み。り。第。一。あ。ひ。い。い
そ。り。や。ア。後。さん。も。え。い。さ。う。色。者。控。び。ふ。り。う。く。
よ。く。され。さ。え。い。ね。く。一。か。あ。る。あ。ど。た。ね。で。あ。ま。せ。う。
あ。ま。さん。と。ん。か。あ。か。下。手。ご。う。う。あ。ね。云。い。て
そ。り。や。ア。あ。ま。の。素。人。と。い。遠。の。ア。る。先。い。あ。ま。の。数。万。人。の。裏。を
扱。ひ。つ。け。て。居。る。の。の。う。何。様。し。く。自。己。が。や。う。に。共。ふ。

ぐらとトのみはけ方を物さうしく。いまど何もおまゐるふ。
後より又一人が「ヤイその世帯を打擡まて」のうへに義ふ
女とりちや洗まわアうらう。大胆畜生どけ振ふぬいせ
あちのみふ筋骨と抜くやるがけ。一子何ぞ世のれもか
りわアうらうねぐ。世来のま中で。千倍唾ををらう始ち
あがらアヤイ井原でも掌させろエト衣衣より 罵うく
借考きく着と捕へ歩んとまるめぞ思ひもよらぬお光の
我慄震ひ怖と。逃んとまされど男をぬよ。迷へて世にい

り得るをてと漂流とまるのこまり。男の中不義なされ。
是れ踏むる徳とまれども。凶見どもの何とがな。云程
りく仲栗りの。酒を飲んよの針殺るれは強ち男を
おもせぬと腕や弄るど引とく人。そ方へ突きのは方へ
遊飛し。ふんがまふ恥辱をうけく。着を悔しくかへ
ども。多勢不義勢のけひぐく。猶も逐れ一流不似く。
きうふ一由もなきおらう。まの嘘囃よとりみるどふ
お後た衣をとり巻く人を置と罵るその人々我押

た五十六 十五



除てをむ侍。後いなるより嬉しくて、
 夫の希さん。加勢をしくか、
 どた。竟足城。潜ごうごうのる遠ひ。至。何の人ヲ人殺の
 中ごのろ。是と潜めり。のでもね人。ナイ。お方の先利
 う。この男を。調き。早やア。更ど。匡らう。昔く。早。性て
 仕。ト。ひ。ひ。り。着。を。引。死。し。て。衣。裳。お。つ。の。る。破。る。と。掛。く
 ば。お。光。い。ま。の。時。や。う。く。安。懐。し。肝。臓。の。獲。る。と。虫。を。お
 破。産。戸。の。中。の。首。め。死。る。に。十。倍。り。の。別。法。男。が。夫。希。を

お。除。て。一。目。か。侍。さん。ま。の。男。の。私。等。が。云。分。が。あ。る。う。う
 新。ま。の。の。ご。あ。あ。い。れ。も。知。り。ね。く。癖。よ。お。持。て。置。て。お。長
 る。せ。上。隣。ら。れ。く。矢。又。希。を。忽。地。に。勃。然。と。し。て。一。ナ。二
 播。い。ま。よ。あ。け。こ。ら。り。や。ア。何。卒。の。ぬ。ご。女。町。人。と。侮。つ。て
 淋。洗。て。活。ま。せ。も。ま。る。氣。ど。ら。う。が。自。己。が。眼。ま。う。つ。ち。や。ア
 手。又。中。の。あ。う。ね。人。う。う。性。生。し。て。を。わ。く。い。け。お。や。ま
 希。の。ぬ。ご。ま。つ。た。か。の。男。が。利。根。を。捕。ま。う。と。実。情。を
 子。を。と。身。を。辱。れ。逃。ん。と。し。る。その。却。合。よ。所。従。脱。れ

トそれ きん 夫より之人 つれ 連多々 そ 蕎麦屋の角と ま 夜曲ッて う 其乃の ま 方へ ま ありけり

作者曰 き あのお あ 個 こ が ま 牙の ま う ま 入 ま 中 ま の ま 種 ま の ま 身 ま 況 ま あ ま ね ま を ま 律 ま 長 ま り ま れ ま ば ま 編 ま を ま 続 ま て ま その ま 委 ま 一 ま き ま 城 ま 解 ま 分 ま く ま べ ま 。

郭乃花笠

第三編

金水作
國直画

先年年初編と見し下りのさう障工とありて二編の發音延び
承及ひし身は回極出懐はし柳葉澤多し出板ははる内味は後の方不い

郭の花笠二編卷之下終

[Faint bleed-through text and illustrations from the reverse side of the page, including a large character '下' (Shimo) and various smaller characters.]

